

スウェーデン 環境ニュース

Vol. 7 2003年 1月号 ページ1/3

動物保護政策により 卵の不足と価格上昇

1988年、養鶏場に使われる小型のケージが禁止されました。養鶏業者は新しいケージへの切り替えが必要になりましたが、多くの業者にはその実行を延期することが認められています。しかし、2004年1月6日が最終期限であるため、今年中に切り替える養鶏業者が多くなります。2年前にはスウェーデンの卵の80%ほどが古い小型ケージで生産されていたことを考えると、これは大きな改革です。しかし、引っ越し中の鶏の産卵は通常に比べ多少減ってしまうため、卵不足が発生しています。卵の消費がピークを迎える4月のイースターを乗り越えられるかどうかの問題となるところで

す。この改革は動物保護を目的にしたものです。鶏の生活環境は改善されますが、卵の価格は上がります。しかし、消費者は動物保護の政策を幅広く支持しているので、価格上昇に対する不満はなさそうです。

古い小型ケージの面積は、1羽の鶏に対しA4サイズの紙に相当する600平方センチメートルでした。EUの最低基準は550平方センチメートルで、アメリカのケージは更に狭いです。

一方、インターネット上の「たまご博物館」によると、日本では最近窓のない「ウィンドウレス鶏舎」が導入されています。内部はコンピューターにより管理、制御されており、温度管理、光量管理、給餌、集卵等が全自動で行われます。給餌や集卵、フンの処理にはベルトコンベヤーが使われます。同ホームページによると、日本では1つの仕切りに1羽か2羽を飼うのが普通で、「2羽を一緒に入れるのは餌を多く食べさせるため、そうすることで互いに競い合って餌をついばむ」とのことです。

スウェーデンでこれから普通になっていく飼育方法には2種類あります。1) 室内で自由に動き回

れる平飼い。1平方メートルに7-9羽が生活します(1羽当たりの面積は約1,430-1,110平方センチメートル)。2) 以前より大きなケージでの飼育。1羽当たりの面積はあまり変わりませんが、ケージ毎の羽数が以前の3羽から6-10羽に増えるため、動き回れる面積が広がります。鶏に自然な行動をさせるために、ケージの中に砂ととまり木と産卵箱があります。

鶏が一番快適な生活をしている所は、環境にやさしい食料品「KRAV」認定の卵を生産している養鶏場です。平飼いで、夏期には野外で草を食べさせています。1平方メートルに7羽以下という余裕を保ち、餌の80%以上は有機栽培によるものです。

スウェーデンのスーパーで卵を買うと、売り場や紙箱の外面や蓋の裏に卵の生産方法の細かい情報が示されています。

フィンランドに古いケージを輸出

禁止された古いケージの多くは隣のフィンランドに輸出されています。EUは2003年始めから古い小型ケージを使った養鶏場の新設を禁止しており、2012年から使用も全面的に禁止します。フィンランドはスウェーデン同様、小型ケージの使用禁止を予定していますが、このEUのスケジュールに合わせています。

スウェーデンは卵を輸入していますが、スウェーデンと同じようにサルモネラ菌の恐れのないフィンランドからの輸入に限定しています。

(DN紙03/1/9、「たまご博物館」<http://village.infoweb.ne.jp/~takakis>、その他)

タラ漁全面禁止は EU委員会の 反対により中止

環境党が昨年9月の選挙後の連合交渉で与党社民党から約束を取り付けた、タラ資源の保全を目的としたタラ漁全面禁止は中止になりました。スウェーデン政府は全面禁止の開始予定を2003年1月から3月1日に延期していたところでしたが、EUの反対でその実現を断念しなければならないことになりました。

EU委員会は1月27日付けのスウェーデン政府宛の書簡で、全面禁止の方法のすべてについて不可能だと伝えています。同委員会は、EUのルールでは、スウェーデン海域外でEUが共同で利用している海での各国割り当て捕獲量設定はEUの管轄下だと主張していま

つづく

スウェーデン環境ニュース

Vol. 7 2003年 1月号 ページ2/3

1ページからつづく

す。従って、スウェーデン政府はスウェーデン漁民にその海域での漁を禁止できません。また、スウェーデン海域内のタラ漁全面禁止も不可能になりました。同海域に限定した全面禁止はタラ資源を保全するのに充分効果なものにならず、その意義がなくなります。EU委員会の書簡は、昨年12月に加盟国が合意したばかりのEU規則を引用しています。同規則によると、EU加盟国が独自で導入できる漁業規制は12海里以内の海域に限定されています。さらに、スウェーデン漁民に限っての禁止は他国の漁師との間での差別扱いと見なされ、EUの条約に反するということになります。もしもスウェーデン政府が全面禁止を強行すれば、EU委員会あるいはスウェーデン漁民から訴えられ、EU裁判所で争うことになる恐れがあります。

この結果にがっかりしている環境党は、EU議会で行動を起こしています。EU議会の各国環境派議員で構成される「グリーン・グループ」の協力を取り付け、1月30日、EU委員会のマルゴット・ヴァルストロム（Margot Wallström）環境担当委員に説明を求める抗議の手紙を送りました。同グループによると、EUの「共同漁業政策」には環境保護目的での「慎重原則」の活用を進める文面があり、それを尊重すべきだということです。また、スウェーデンがEU加盟の条件を交渉した際、スウェーデンは「環境保証」という保証を得ています。これは、スウェーデンは環境保護を目的にEU法規制よりもきびしい環境保護対策を進めてよいという意味のものです。環境派議員らは、タラ漁全面禁止への反対はこの保証にも反するものだと主張しています。

（DN紙03/1/27、環境党プレスリリース03/1/30、その他）

ウナギ資源も危機的状況

タラ資源についての議論が盛んな中で、ウナギ資源はタラよりももっと危機的な状況にあると主張する研究者がいます。

漁業庁のウナギ専門家ホ・カン・ヴィックストロム（Håkan Wickström）氏は、ヨーロッパに毎年やってくるシラスウナギ（ウナギの稚魚）の数は1970年代後半の2%にまで減っていると言っています。タラの固体群は複数で、固体の寿命と繁殖のサイクルがウナギに比べて短いです。それに対し、ヨーロッパのすべてのウナギは同じ固体群で、本当の意味でEUの共同資源であり、ウナギこそがEUの共同保全対策を必要としています。全ヨーロッパのウナギは北大西洋の藻海で繁殖していると考えられています。ふ化後のウナギはメキシコ湾流に乗ってヨーロッパを目指し、シラスウナギに変態します。そうしてスウェーデンにやってきたシラスウナギは、20年ほどかけて捕獲に適したウナギに育ちます。現在の捕獲量減少は1980年代にシラスウナギが少なかったことの結果です。現在ヨーロッパに来るシラスウナギが記録的に少ないということは、15-20年先の捕獲量減少が予測されます。

ウナギが減ったのにはいくつかの原因が考えられます。乱獲はその一つです。（日本からの需要増加とそれに伴う価格上昇がその一因です）。気候変動によってメキシコ湾流の流れが変わった可能性もありますし、ウナギの脂肪に蓄積された化学物質が繁殖に悪影響を与えている恐れもあります。原因は科学的には解明されていません。

（Sydsvenskan紙03/1/16、その他）

「暖房のない家」が冬を無事に越している

ヨーテボリ市から南へ約20kmのところにあるビルダール（Billdal）に、2001年春、「暖房のない家」が完成し注目されました。家は昨年と今年の冬の厳しい寒さを無事に越してきました。居住者は外の気温が-20℃まで下がっても快適な生活を送っています。

スウェーデンの住宅では各部屋の窓の下に暖房機があり、家中を循環する温水のセントラルヒーティングで暖房されています。一戸建て住宅にはボイラー室があり、石油か木質ペレットを燃料に温水を沸かしています。電気暖房しているところもあれば、地域暖房に接続され、暖房熱を購入している場合もあります。

「暖房のない家」にはそれらの暖房設備がなく、徹底した省エネ設計になっています。太陽熱、住む人の体温、照明機具、家電などから発する熱だけで十分な熱

つづく

発行／編集：Lena Lindahl（レーナ・リンダール） 編集協力：土屋なおみ

年11回ファックス・電子メール発行、年間購読料5,000円、記事の転載をしたい方は連絡ください。

問い合わせ先：電話／ファックス：03-3422-7019、<http://www.netjoy.ne.jp/~lena>

スウェーデン環境ニュース

Vol. 7 2003年 1月号 ページ3/3

2ページからつづく

源となり、室内の気温は年中18-20 に維持されます。

ビルダールの20軒の家は長家のように壁と壁を合わせて一列の形になっていますが、それぞれの床面積はスウェーデンでは普通サイズの120平方メートルです。同じ規模の普通の住宅は年間約25,000kWhのエネルギーを消費しますが、「暖房のない家」は約7,000kWhだけです。

徹底した省エネ効果は、以下の工夫によるものです。

窓ガラスは三重になっていて、内側の2枚の間に断熱効果のあるクリプトンガスが入っている。窓の省エネ効果を表す「U値」が0.85と低い。(普通の三重ガラスの窓は約2.0。)徹底した断熱(普通なら230mmの壁が435mmの発砲スチロールと鉱物綿。屋根は480mm。)

換気扇が外に出す空気の熱の80%以上が回収され、取り入れる新鮮な空気を暖めるために使われている。

太陽熱温水器(5m³)が夏期の温水を供給している。

夏期の暑い日には、天井の窓を開けることによって過剰な熱を逃がし、自然な換気をする。

南向きの大きな窓で太陽熱を取り入れている。

北側の風除けで熱損失を防止している。

特に寒い日に使用できる電気暖房機が一つだけ設置されています。居住者は室内の気温を22-23に上げたい時や特に寒い日に時々使っているそうです。

「暖房のない家」プロジェクトの発案者で設計者でもある建築家のハンス・エーク(Hans Eek)氏によると、「ドイツでは既に1,000戸ほどの住宅が同じ原則で建てられています。ノウハウが不十分なことから私達の建設業界は遅れをとっています。」ということです。住宅を所有してい

る自治体の住宅公社エーグナヘムスボラーゲット(Egnahemsbolaget)のベルティル・リッグネース(Bertil Rignäs)社長は、気密性の高い室内環境によるカビやアレルギーの発生を心配していたそうです。しかし、建設段階において湿気が壁の中に残らないよう徹底した努力をした結果、そういった問題は起きていません。

価格は普通の家に比べ少し割高になりますが、その分は電気代の節約で回収できます。

(DN紙03/1/23、GP紙02/2/23)

全飲食店が2004年以降 全面禁煙へ？

政府と議会は、2004年以降、スウェーデンの全飲食店を全面禁煙にする目標を立てています。政府は2001年12月5日付けの政策案で、飲食業界の自主的な努力で飲食店における喫煙を追放できなかった場合の立法化を提案しました。新法は2003年1月1日の施行を目指していましたが、遅れています。モルガン・ヨハンソン(Morgan Johansson)国民健康相は、立法化に踏み切る前にもう少し業界の自主努力を待ちたいそうですが、政府の依頼で飲食店の全面禁煙を調査した国民健康研究所は立法化の必要性を主張しています。

国民健康研究所は2003年1月28日、調査報告書を政府に提出しました。同研究所によると、スウェーデンでは間接喫煙から生じた被害で死亡する人は年間500人以上います。タバコを吸わない人への被害を防止することが、全飲食店を禁煙にする最大の理由です。特に被害を受けているのは飲食店の従業員です。飲食店労働者が肺がんで死亡するリスクは、他の職業に就く人の2-3倍と高くなっています。提案された禁煙の対象には、レストランだけでなく、バーやパブのような酒場も含まれます。酒場とレストランを区別するのは現実的に難しい上、レストランに限定することで酒場での喫煙が今より多くなり、従業員の負担が増加する恐れがあります。禁煙が義務化された場合、飲食のできない、換気の良い特別な「喫煙室」を提供する可能性だけは残ります。

ちなみに、スウェーデンではタバコの広告やCMは1994年以降禁止されています。

(TV4Nyheter 03/1/29、国民健康研究所プレスリリース03/1/28、その他)

(今月号は上倉あゆ子さんの編集協力に感謝)

発行/編集: Lena Lindahl (レーナ・リンダール) 編集協力: 土屋なおみ

年11回ファックス・電子メール発行、年間購読料5,000円、記事の転載をしたい方は連絡ください。

問い合わせ先: 電話/ファックス: 03-3422-7019、<http://www.netjoy.ne.jp/~lena>